

# 国宝 高松塚古墳壁画（東壁女子群像）の下地研究及び現状模写

博士前期課程 日本画領域 石田 維

《原本について》

国宝 凝灰岩、漆喰下地 1134×870 (mm) 飛鳥時代 文化庁

高松塚古墳は昭和47年3月、奈良県明日香村にて発掘された。古墳内部には漆喰下地の彩色壁画があり、それまで日本において発見されたいくつかの装飾古墳には漆喰壁に描かれたものは当時まだ他に例がなく、20世紀日本考古学史上最大の発見となった。昭和49年には壁画が国宝に指定され、発掘と平行して空調設備を備えた施設が墳丘に建設され、現地保存が決定する。しかし、発掘により環境は変わり雨水による浸水やカビによる多大な被害によって壁画の褪色や変色が顕著になっている事が平成14年に明らかになり、その後古墳の解体による保存が決定・施行され、現在もなお、厳重な設備のもと修復作業が行われている。壁画には、男女の人物群像と中国の思想に基づく四神（青龍・白虎・朱雀・玄武）の図と日像・月像、そして天井には星宿図が描かれている。しかし、南壁に描かれた朱雀は鎌倉時代の盗掘によって土砂が流れ込み、見る事は出来ない。また、古墳の被葬者については諸説あり特定されておらず、作者についても不明ではあるが、その技術の高さからおよそ8世紀前後の渡来人によるものと推定されている。また、下地については制作方法や素材等不明な点が多く、顔料には群青・緑青・ベンガラ等が用いられたと推定されるが、特に赤色顔料においては未だ明確になっていない。今回の研究では比較検討した顔料や素材を用い、作品の現状の損傷が著しいため発見当初の状態の模写を行うものとした。

《模写の工程》

## 1、基底材の準備

650×650×50 (mm) の福島県産凝灰岩の表面を、金剛砂を用いて荒らし漆喰の食い付きをよくする。水分を石材に十分浸透させ、漆喰の急激な乾燥による表面の亀裂を防ぐ。



図1 漆喰を塗る様子



図2 漆喰塗布直後

## 2、下地作り

貝灰を水で練った練り漆喰に対し、米糊を5~10%混ぜ合わせ、漆喰をつくる。コテを用いてこれを石に3mm程度の厚みでよく押さえながら塗る。密閉しながら一ヶ月程度かけてじっくりと、少しずつ水分量を減らしながら乾燥させる。[図1、2]

## 3、型写し

完全に漆喰が感想したら鉛白を塗り、全体に色をかける。念紙を下に敷き、壁画を印刷した和紙の上から線をなぞり型を写し墨で線書きする。[図3]



図3 線描き



図4 彩色途中

## 4、彩色

顔料を用いて彩色を施していくとともに、剥落や画面上の状態を把握しながら金ブラシ等を用いて表面を荒らしたり剥落表現をし漆喰の風化を表現する[図4]。全体の色調を合わせながら現状に雰囲気を合わせ仕上げる。

《まとめ》

今回の作品を制作するにあたり同素材による模写の難しさを随所で感じたが、和紙では表現しきれない漆喰の持つ柔らかな表情を表すことが出来たように思う。また、写真や和紙による模写では感じる事の出来ない剥落の立体感や素材の重み、目視では不鮮明な作品の状態等を明快に表現することが出来た。この作品の模写制作を通し、制作当時の技術の高さを痛感すると共に飛鳥時代に漂う渡来人のもたらした文化と日本独自の文化が融合した独特の世界観を持つ空気を感じられたと思う。